

2014年9月7日主日礼拝説教(要約)

聖書 ルカによる福音書 6章 1～11節

説教「安息日の主」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

ユダヤの人々は、1週間の終わりの日すなわち土曜日を安息日として守ってきました。神から命じられた休息の日として大切に過ごしました。十戒には、神は6日間働いて天地万物と人間を創造され、7日目にはお休みになってこの世界を祝福された、だから、それに応えて私たちも7日目は神と共に休むことが定められています。すべての働きを中断し、使用人や家畜も休ませ、共に創造主である神を仰ぎ、神の祝福の中に身を置くのです(出エジプト 20:8-11)。ところが、安息日の律法だけが独り歩きを始めると、人々はその日は何をしてもよいか悪いか、といった掟にしばられ、安息日の恵みと喜びは見失われていきます。主イエスはそんな的外れな考え方と戦われ、本当の安息へと私たちを導かれます。

ある安息日に、主イエスの弟子たちが麦畑の中を通り、麦の穂を摘んで手でもんで食べたということを、ファリサイ派の人々が批判しました。ここで、問題となっているのは、弟子たちが勝手に他人の畑に入って麦の穂を摘んで食べたということではありません。お腹を空かせた旅人や身寄りのない人が畑の作物をとって飢えをしのぐことは当然の権利でした(レビ 19:9-10)。ファリサイ派の人々が咎めたのは、彼らが「麦の穂を摘み」「手でもむ」ことが収穫作業と脱穀作業にあたり、安息日に禁じられた労働にあたるということです。滑稽なことですが、人間は神の律法をこのように捻じ曲げていくのです。律法はよいものですが、律法主義は人間の悪しき産物です。

このファリサイ派の批判に対して、主イエスはダビデのエピソードを引いて答えられます。ダビデがサウル王に追われて放浪生活をしていた時、食うや食わずの状態に逃げ込んだある祭司のところで、本来祭司しか食べることのゆるされなかった供えのパンをもらって食べたのではないかということです(サムエル上 21:1-7)。ダビデが、律法を超えてパンを食べることが許されたのなら、主イエスが弟子たちに麦の穂を摘むことを許したとしても問題にはならない、なぜなら、「人の子は安息日の主」だからであるということです。主イエスは安息日の掟に支配される方ではありません。安息日が証していた方です。私たちに真の安息を与えるために来られた方です。主イエスは安息日の目的である神との交わりの喜びを実現するために来られたのでした。

また別の安息日に、主イエスは会堂で一人の右手の萎えた人を癒されました。ファリサイ派や律法学者たちは、主イエスが安息日の掟を破られるかどうか、主イエスを訴える口実を見つけようと注目していました。そんな彼らの考えを見抜かれた主イエスは、あえて手の萎えた人を会堂の真ん中に引き出し、彼らに向かって「あなたたちに尋ねた

い。安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか、命を救うことか、滅ぼすことか」と問われ、その人に「手を伸ばしなさい」と言って、いやしの業をなさいました。一刻を争う救急医療ではなく、安息日が終わるのを待って行っても問題がない行為ですが、主イエスは明日に伸ばすことなく実行されました。

肉体的な命のことで考えるなら、この人の状態は命に関わるものではなかったでしょう。しかし、霊的な状態を考えるなら、右手の萎えたその人の命は危機に瀕していました。自分は神から遠く離れていると思いこんでいたこの人にとって、一番必要だったのは、神がなおあなたの神であり、神はあなたに対して恵み深くあられ、あなたもまた神が選び召されたアブラハムの子なのだという宣言でした。その宣言が力強く、目に見える仕方で発せられることでした。彼が言われるままにそのとおりにすると、彼の手は元通りになりました。彼は今、周りの人々のとげとげしい視線や喧騒をよそに、自分の前に立つ主イエスだけを仰ぎ、神が自分のためにここに来てくださっていること、自分が神に生かされ、救われてここにあることを深く味わったに違いありません。神と共にあり、神の祝福の中に憩う安息日の喜びに身を置くことができたのです。私たちはこのような安息日の喜びを経験しているのでしょうか。

主イエスの挑戦は、ファリサイ派の人々を怒り狂わせます。彼らは「イエスを何とかしようと話し合った」とあります。たしかに、主イエスの行動は激しいものがありました。しかし、その激しさは神の愛の激しさでした。ご自分の独り子を犠牲にしても、すべての者をご自身の祝福の中に、真の安息の中に招き入れたいと願われる神の思いの激しさでした。この神の愛の激しさによって、私たちはいま真の安息へと招かれているのです。主イエスは「安息日の主」として、安息日を、神を喜ぶ日とし、神の祝福が私たちにも注がれていることを確認することができようにしてくださったのです。

この安息日の本来の精神を受け継ぎながら、私たちは、週の最初の日である日曜日を、十字架にかかって私たちの罪を贖い、復活された主イエスが私たちに会ってくださった日として大切に守るのです。「・・・しなければならない日」とか「・・・してはならない日」とかではありません。自分の正しさを主張したり、自他の信仰を見比べて一喜一憂したりする日でもありません。主イエス・キリストによって注がれた神の祝福をしっかりと受けとめ、神を見上げる素直な眼差しを回復される日なのです。

右手の萎えた人が、主イエスの前に引き出され、手を伸ばしなさいとの御声に答えて手を伸ばしたように、心萎え、頑なになっている私たちが、主の前で、柔らかな心とすこやかな姿勢を取り戻していくのです。主の日毎にそこに立ち帰ることができることは、何と幸いなことでしょうか。主の日ごとに、主を喜ぶことができることこそ私たちの力なのです。